

カストロとハグした日本人 バイクで世界を回った 戸井十月さん

吉川 勇一

■本誌で99年から02年まで、毎回素晴らしい作品で表紙を飾ってくださったのが画家の戸井昌造さんの絵や政治カリカチュアでした。この戸井さんは、2000年の4月に逝去されました。77歳でした。本誌60号には、大木晴子さん（本会員）の昌造さんへの追悼文が掲載されています。

■ところが、その子息の作家、戸井十月さんも、今年7月28日に亡くなられたのです！父君の昌造さんよりもずっと早い64歳での逝去でした。マスコミでは、オートバイで大陸を走破したことや、ATP賞ドキュメンタリー部門優秀賞を受賞したNHK番組「生き抜く 小野田寛郎」などが紹介されていました。しかし、十月さんはカストロやゲバラに恭敬・傾倒する親ラテンアメリカ活

動家でもありました。本誌でも、87号、97号に十月さんの詳しいラテンアメリカ評論や対談が載っています。父子とも、市民の意見30の会への積極的な賛同・協力者でした。

■昌造さんは肺がんで亡くなられたのですが、十月さんもがんでした。しかし、

今年初めまで

制がん剤投与を続け、かなり治癒が進んでいると思われていました。昨年の10月には、かつてのベトナム反戦の活動家たちの泊まり込みでの集まりがありましたが、十月さんも私も一緒に参加していました。彼は制がん剤ですっかり髪がなくなっていました、私と並んで写真に撮られました。たまたま後ろにあったライトも写って、まるでハゲ3人が並んでるみたいだな、などと笑いました（右の写真。左側が十月さん）。すっかり元



気がなっていると私は喜んでいただけに、僅か半年後の落命は本当にショックでした。

■十月さんの小説やルポなどの著書は実に多いのですが、『カストロ 銅像なき権力者』（03年、新潮社刊）では、「権力者を飾ることを禁じているのは、多分世界でキューバだけ」と言い、この国には日本やアメリカが失った「希望」があると彼は強調します。しかし、

何よりもこの本でぜひ観て欲しいのが、おそらく日本人で彼一人だけだったのではなからうかと思うのですが、上に紹介してあるカストロとハグしている（強く抱きあう）写真でしょう。これほど嬉しそうな十月さんの写真はまず他には見られないと思います。

■戸井十月さんの公式ホームページは、「越境者通信」で、<http://www.office-ju.com/>ですが、それにはさまざまな文章や写真がはいっています。その中の「100枚の絵ハガキ」という短篇集の一番最後の第56号「メッセージ」には、沖縄出身の老人の言葉として、次のような表現が入れられています。

——人間は、誰だって1回以上は死なない。理不尽と不公平だらけのこの世界で、唯一それだけは公平だ。人間は1回以上死なない。つまり、誰だって1回は必ず死ぬ。だからこそ、今この瞬間を全力で生きろ——と。そして、十月さんは「挫けそうになつた時、……老人の言葉を思い出す。そして、なんとかその場を凌いで生き続けてゆこうとする。人間は、その生き方そのものがメッセージとなる、地球上に生きる唯一の生きものである」と結んであります。これこそ、彼が死ぬ少し前に書いた彼の気持ちの表現だったのだろう、と私は思っています。

■さまざま多様な文章が豊かに入っていますので、インターネットを見られる方は、ぜひこの「越境者通信」をご覧になってみて下さい。（よしかわ・ゆういち/本会共同代表）

